

積雲照と中江兆民の出会いをめぐる

— 近代化という呪縛を離れて —

大塚 秀 見

はじめに — 歴史認識をめぐる

現在の私たちの自国の歴史意識には、ある種のマイナスイメージが半強制的に担わされているのではなかろうか。はじめは、他国からの干渉によってであったものが、現在は自己増殖的な形で、自己形成してしまっているように思われる。勝者が自らを正当化するのが生物界の常とはいえ、戦後日本の歴史意識には異常なまでの自己否定の作用が働いている。国内での戦乱を通しての権力者の交代は経験していても、異民族による支配、国際舞台での駆け引きの不足がもたらした結果と言えるかもしれない。

日本人好みの勸善懲惡的な発想が染み込んでいたためでもなかろうが、敗戦という極限状況のなかで、自らの過去を悪として脱ぎ捨てることによって、切り抜けようとしたのだろうか。残念ながら、冷静に事実関係を検証し、自らの歴史を直視しようという姿勢はほとんど見受けられない。過去を批判し、自らとは関係ないこととして、自らも批判者としての高みに立ってしまおうとするイビツな言論が、六十年近くも続いている。戦後のこう

した状況が、冷凍保存されたまま現在にまで至っているということができよう。

江戸時代の鎖国という状況は、他国との関係を考えずに済んだ歴史であった。そして、明治時代から昭和二十年までの日本の歴史は、それ以前と比較するならば、まさに激動の歴史であった。戦争という国対国という対立に突入したのは、弱肉強食の世界情勢の中での一つの可能な限りの選択であったにもかかわらず、一部の権力者によって引き起こされた悲劇としてしか捉えられていない。このような歴史認識の影響は、政治の分野のみならず、社会・文化全般にわたって、日本人の意識をおおってしまっているようにみえる。

しかしながら、この状況は非常に矛盾したことなのである。私たちの文化は、歴史的・時間的な継続のうえに成り立っている。過去を捨象してしまつて、新たな文化を創造することはできない。変化するためには、それ以前のものが必要なのである。無からは何も生まれない。この関係は、「言葉」を考えてみれば、一目瞭然であろう。言葉は変化するものであるとはいへ、全く新しい言語、言語システムになるということは不可能であろう。人々は、習得した言語による思考システムの影響から無関係ではありえない。同様に、生まれ育った地域に根ざした文化は、切り離せるような種類のものではなくて、かけがえのないものである。

一、明治期の仏教をどのように理解するか

明治時代の仏教のあり方に関して、歴史認識と同様のことが言えよう。つまり、戦前と戦後は別なものとして捉えようとする見方は、きわめて皮相である。そのような見方からでは、明治時代の仏教のあり方および現代の仏教のあり方に関して、いかに思索を深めようとも、それは地に根をはった理解ではないだろう。すなわち、はじめにマイナスイメージありきではない明治期の伝統仏教理解の姿勢が求められるだろう。

明治期を代表する仏教者、積雲照を考える時にも、それ故に注意深い視点が是非とも必要となってくる。それは、戦後の支配的な視点から、つまり、欧米で行われていることが理想的なものと考えることから自由でなければならぬ。すなわち欧米モデルが頭に染み込んでしまった知識人たちの、宗教はこうあるべき、仏教はこうあるのが真の仏教なのだ、と何の疑いもなく考えてしまうことから離れる必要がある。それを意識的に試みなければ、それらの矛盾点に気づくことはできない。

近年、研究者の著した宗教書としては珍しくベストセラーとなった『日本人はなぜ無宗教なのか』¹は、そもそも「宗教」とは、どのようなものとしてイメージされているかの捉え方が、欧米と日本では大きく異なっているということを示した名著である。その著者である阿満利磨氏は、さらに「人はなぜ宗教を必要とするのか」で、自身の宗教観を踏まえて、日本人にとっての宗教とはという観点から興味深い考察を加えている。このように自身の立脚点を鮮明にして論じた点は、とても評価すべきところである。

その本の中で、論の本筋ではないが、積雲照と中江兆民の対面について述べている箇所がある。しかし残念ながら、そこで描かれている雲照像は、あまりにも偏った見方で、誤謬に基づき過ぎているように思われる。結果的には、先に批判を試みた、戦前を今よりも劣ったあり方とする見方と何ら変わらなくなってしまう。

このように、かなり注意深い研究者であっても、自身の研究の本筋と違う場合には、安易に大勢の流れに乗ってしまう例として、検討する必要があるだろう。つまり、安易に記された部分だけを知識として受け入れた人は、「雲照」の姿が誤って固定化されてしまうことになると思われる。

それでは、積雲照と中江兆民との出会いはどのように行われたのかを、阿満氏の描き方を含めて、三方向より再検討していくこととしよう。

二、阿満氏の描いた雲照と兆民の対面像

阿満氏は、廃仏毀釈の流れに対抗しようとした仏教運動を、「戒律復興運動」と捉えている。そこで、戒律復興運動の試みには一定の評価を与えながらも、それが民衆に定着しなかったのは、その運動の中に限界が存在したという考え方なのである。そして、結論的には、その運動では、現代の人々の救いには通じないという見方を提示している。つまり、戒律運動は仏教の本質的なあり方ではないと考えているのである。

その実例の一つとして取り上げたのが、釈雲照と中江兆民の病床での対面の場面なのである。阿満氏の論の全体構成から見ると、この例は必ずしも重要な位置にあるわけではない。しかし、雲照を理解しようとする立場からみると、あまりにも問題点が多い理解と言わざるをえない。なぜなら、論拠となっている資料があまりにも偏っているからである。

まずは、少々長くなるが引用して検討してみよう。

聖職者が「清僧」であってほしいという願望は、現実の聖職者の「墮落」をきびしく批判することとなり、それがひいては宗教への不信を生むという図式を紹介したのですが、聖職者が「清僧」であれば宗教への信頼が生まれるのかどうか、ことはそれほど単純ではないようです。欲望を超越した、特別の人格者であることだけが評判となり、肝心の教義がかすむことになりがちなのです。「清僧」の限界を示すエピソードを紹介しておきましょう。

それは、雲照という「高僧」が中江兆民の臨終におしかけて響響を買ったという話です。——中略——

雲照は、癌の苦痛とたたかっている兆民の迷惑をも顧みず、病床で護摩を焚き、呪文を唱えたといえます。「先生はムクと頭を擡げてまだ止めぬかという風に律師の顔をにらめつけた」、とあります。またのちに兆民は友人に、雲照の行為を明らかに揶揄する仕草をして見せた、とも記してあります。その友人は、雲照の仕業は、兆民の臨終の安心を奪う行為であり、兆民も仏教に帰依したと宣伝したのは狡猾な行為だ、と断罪しています（板垣退助「兆民先生と雲照律師面会の事実」、「近代日本思想体系」³『中江兆民集』、筑摩書房）。

雲照は、兆民の無神論を、言葉によって、論理によって翻そうとしたのではなく、護摩を焚くとか呪文を唱えるという、兆民からいえば「呪術」に等しい行為を繰り返すばかりであったのです。つまり、雲照は「戒律」によって身に付いた「靈力」を行使して兆民の無神論を、いわば退治しようとしたのです。

「清僧」のありがたみとは、この程度のことだった、というのはいいすぎでしょうか。「清僧」待望は、その「靈力」を待望することであって、宗教の本質にかかわることとはいえないのです。⁽²⁾

ここには実にさまざまな問題点が含まれている。まず、「清僧」に関しての捉え方であるが、あまりに一面的すぎるように思われる。その理由の第一は、人類の長い宗教史上、必ずや「清僧」的役割を担った人の存在が認められるということである。つまり、スーパースターのいない宗教は、長く民衆に定着していかないという事実がある。実際には、その人物が、本当のスーパースターであったかどうかよりも、以降の人々の中にどのような位置づけられるかという意味であるが。

二つには、すべての宗教者が「清僧」的な役割を演じてしまったならば、宗教は遠い存在、近づき難い存在となってしまうかねないという点である。それ故、「墮落」か「聖者」かというような、極端な図式は、そもそも

現実の宗教現象に目を向けてみれば、それほど単純な構造ではないことが明らかとなる。

次に、本題である雲照が兆民を訪ねた時の場面の記述についてみていこう。阿満氏が、ここで資料として用いているのは、板垣退助の「兆民先生と雲照律師面会の事実」からのみである点だが、まず第一の根本的な欠陥ということができよう。その理由は、板垣退助の置かれていた立場を考えるとわかるだろう。つまり、板垣退助が中江兆民の民権思想に傾倒し、その信条を継承していることを自ら任じていたことは、明らかな事実である。すなわち、兆民を旗頭に行っている者たちにとって、最後になって兆民が立場を大きく変えてしまうこと、変節してしまうことは、支持者にとっては非常に困った状況になることは自明のことであろう。そうした状況を理解した上で、この板垣退助の論は読み込まなければいけないものである。然るに、阿満氏は無批判に、板垣の論拠のみによって、両者の出会いの事実を考えてしまっているのである。それ故に、実際の両者の対面がどのようなものであったかについて、研究が不備であるといわざるをえない。

また、護摩を焚いたという記述も、兆民が病に臥せていた家の大きさのことを考えるならば、誤りであったことが明らかである。なぜなら、兆民は大邸宅に住んでいたわけでもないことから、護摩を焚くためのスペースはなかったことがわかる。つまり、「護摩を焚いた」という記述が事実上は不可能であったことが証明されるからである。このように板垣の論には、明らかな事実誤認が含まれており、その点から考えても、他の資料との比較検討が必要なのである。

さらに「宗教」を捉える視点からも、一点触れておく必要がある。阿満氏の抱く宗教観には一定の理知的な意味での価値は十分にある。ただそこで描かれている宗教のあり方、信仰のあり方は、強者の論理に基づいたものなのではなからうか。十分に時間と知力を有したもののだけが可能な宗教理解、信仰獲得への道なのではなから

うか。ただ実際には、死を前にしてはじめて宗教と出会う人々や、日々の生活に追われて宗教と関わりをもてないでいる人々、つまり、宗教に関する弱者の存在を無視することはできないのではなからうか。この問題は、宗教に実践として関わった時に、必ずや生じてくる大問題なのである。そもそも「靈力」を待望する人々を宗教の本質がわかっているといないと切り捨てることができるのだろうか。この問題は、別の大きな課題ともなる。その検討は、別の機会に譲りたい。

三、両者の出会いを巡る当時の反響

雲照が兆民を訪れた顛末に関しては、さまざまな報道や論説がなされたようである。両者は、当時、思想信条の方向こそ違え、社会に対して非常に影響力のある人物であったからであろう。ただ、残念ながら、客観的に両者の対面場面が描き出されていると考えられるような記述は、見出すことができない。

まず、兆民自身がその時、すでに病状が悪く、自分の意思を伝えることができるのはわずかに妻のみであったことが挙げられる。そして、妻にしても十全に細かい点まで理解できたかは疑問である。さらに、対面の後すぐに兆民が亡くなってしまったという事実起因するのである。

そのため、ほとんどの記述が類推によつて書かれていると言つても過言ではないのである。そうした状況から、雲照の側からの資料、および実際の場面に立ち会った兆民の妻の述懐がある程度の信憑性をもつと考えられる。しかし、残念ながら本人が直接に記したものはないように思われる。また、たとえあつたにしても、それは客観的な一次資料というわけにはいかなのである。なぜなら、雲照は一方の当事者であり、兆民の妻も兆民を信奉していたので、兆民の側に立つて語られると考えられるからである。そうした立場は、板垣退助についても論じ

たような具合なのである。そして、兆民の妻の場合には、周りからも、そのような要請が、直接的でなくとも暗黙のうちにあったことは十分に想像されるのである。

そうは言っても、現場に居合わせた人々の証言は、他に比べれば間違いなく貴重な資料となることは確かである。『報知新聞』明治三十四年十二月七日号では、雲照が兆民を訪れた際の出来事を、兆民の妻へのインタビュー記事として掲載している。

雲照律師の来られたことですか、ハイそれはモ一数年前のことです。度々お使ひで中江に面会を求められましたが、中江は「自分はコレでも悟りを開いて居る積りであるから、如何なる名僧たりと、お目にかゝる必要はない・・・」と御存知の性質で毎々お断り申しました、然るに近來河野広中さんの御夫人が參られて屢々律師の授戒をお勧め下さいます。是亦お断り申しましたが、先月二十八日のことで律師より又々お使ひで是非々々面会をとりましたが是もお断り致しますと、其翌日午後には律師自身に此茅屋へ来られ達て妾へ面会を求められました、妾は兼て中江は無神無靈魂主義なれば折角の御來臨なれど、申せし所、律師は却つて其誤れるを論され、且病室にて加持祈祷を営まんと御親切なるお言辭に妾も殆んど当惑致しました、中江は是迄幾度か御面会を謝絶して聞き入れず、さりとして当世の生仏とも云はる、律師が態々のお出でを管なくお帰へし申すも失礼にや当らんと、此間の妾の当惑はお察しを願ひます、兎も角一応と存じ中江へ篤と告げました所、幸ひに諾を得て病室へ御案内申しました、中江は苦しき中に目札を済し、律師は加持祈祷の用意されしに、中江は非常に激動し不自由なる身をモガキ果は枕を取つて抛たんとする有様で、妾共はヒヤ／＼手に汗を握りました、律師にも此態を察せられしと見え、加持もソコ／＼にしてお立ちになりましたが、側に居

る妻共の此時の心配は実に言辭には尽せません、律師に対しては誠にお気の毒千万で御座いました、併しながら中江は飽迄も右の精神を以てお断り申せしに、達て先方よりの御入来でありましたから如何とも致し様がありませんのです、律師は俗衆千人を濟度するよりは一中江を成仏させるを欲しられたかと伺ひましたが、律師の仏法の為めに尽さる、精魂にも驚き入つたもので御座います……⁽³⁾

この兆民の妻による述懐は、両者の対面があつてから、かなり早い時期に語られたものであることから、現存する中では、最も留意しなければいけない資料であろう。

ここでは、兆民の妻が語つた形で、紹介されているのではあるが、当然ながら語つた人と書いた人は違うので、書いた記者の視点が入り込んで構成されていることも考慮しなければならない。そうしたことを加味した上でも、興味深い点が見受けられる。

まず、雲照が兆民に面会しようとしていたのが、数年前からであつたということが確認される。このことが意味するのは、雲照の兆民に対する接触が、ベストセラーである兆民晩年の『一年有半』の出版以前であつたことである。つまり、兆民が自ら死を覚悟する以前から、兆民との面会を雲照が望んでいたことである。つまり、阿満氏が望む論理的な意見の交換を、雲照は実践しようとしていたということが予想されるのである。何も、病床に臥せてから、兆民を説き伏せようとしたわけではないことがわかる。

また、この訪問には間に立つ人がいたことが示されている。それは、河野広中⁽⁴⁾の夫人の存在である。明治政府の要人であつた河野広中は、兆民並びに雲照の外護者であり、協力者であつた。ものの考え方が極端に異なる両者を、同時に支持するのは現代の感覚では不思議に映るかもしれない。しかしこの当時は、自分と考え方が異なる

つていても、能力のある人を援助しようとする度量のある人物がいたのである。

さらに、兆民が病で床に臥してからは、妻を通してのみ、返答をしていたことが伺える。他の人には、兆民の言葉が聞きとれなくなっていたのである。そして、すべての問い合わせに對して、その都度、兆民の妻が兆民に伺いをたてて返答をしていたのではないことがわかる。そうした状況の中でこの両者の対面という出来事は、本人に確認した結果として、妻の思惑に反して実現したことが明らかとされている。つまり、雲照が無理やり寝ている兆民の枕もとへ押しかけたわけではない。この点は、よくよく確認しておく必要のある重要なポイントである。

四、雲照側からの反応

当事者の一方である雲照が、この対面について語っている資料は見当たらない。新聞等の世間の問題には、まるで関心をもたずに生活していた雲照は、実際には板垣の檄文も目にしなかつたのではないかと、推測されるほどである。

そのため、この間の事情に関して、雲照側の資料もあまり多くはない。わずかに、弟子の草繫全宜が著した『釈雲照』の中に収められた日誌風の記録に次のような記述がある。

翌三十四年十月三洲地方巡教。十二月和上は河野廣中氏夫人の依頼にて、當時無神無靈魂説を主張しわが國に於ける唯物主義思想の急先鋒を以て目されたる兆民中江篤介氏を瀕死の病床に訪ひて加持を行ふ。蓋し和上の精神は、無神無靈魂的思想を懐くが如きを以て、死後の集苦無量を免る能はざるものとなし、かくの

如き断見を去つて真に佛陀の光明に浴すること人間の最も大なる幸福なればと信じ、誠心誠意かくの如き人を救済すること自己の最も重き義務なりと云ふにありしなり。然るに此の事世に誤り傳へらるゝや、世評囂々甚だしきは和上を以て折袴の押売をなすものとまで誹謗するものあるに至れり。然れども純一なる和上の胸中何の禍するものかあらん。和上はた、曰く、「我が心を知るものは知る、知らぬものは是非のなきぢや」と。此一語實に高潔なる和上を語り得て餘すところなし。

この記録では両者の対面は、十二月のところ記されているが、正確には十一月二十九日に対面が行われたことは、他の資料から考えて間違いないだろう。弟子たちには気なっていたであろう世間の風評も、雲照自身にとっては、ほとんど問題にされていなかったことが伺われるのである。

また、雲照は世間のことに関心を示さず、仏教書以外の本および新聞や雑誌を読まない生活をしていたようなので、批判の声はそれほど強くは感じていなかったと推測される。それは、周りの取り巻きである弟子や支持者の人たちの声を通していたがために、その批判の舌鋒が、十分に届いていなかったと解される。もし、反論しないことによって、自分ではなく仏教に対する信頼が傷つくと考えたのであれば、きつと反論したと考えられる。しかし、自身の弁護のためのみであつたら、戯論としてやはり応じなかつたであらうと思われる。

「我が心を知るものは知る、知らぬものは是非のなきぢぢや」という言葉が、雲照の立場を鮮明に示しているということができよう。

そして、両者の対面が、阿満氏の理解、板垣退助の理解通りであつたなら、雲照がそれ以降八年間も、引き続き多くの支持を受け続けることはできなかつたであらう。実際には亡くなるまでのその後八年間、明治、

大正に活躍した多くの要人およびその夫人から、圧倒的な支持を受け続けたのであった。その支持者の多くが、知識人たちであった点も、阿満氏の解釈では説明がつかないであろう。

結語

残念ながら釈雲照と中江兆民の病床での出会いが、実際にはどのようなものであったかを、正確に知ることはできないようである。また、より客観的な立場に立つような新たな資料も今のところ期待できない。

しかし、本稿で目指した両者の出会いを巡るさまざまな言説の背景に関しては、少なくとも理解の方向性が明らかとなったと考える。つまり、現代の思想潮流に合わせて、両者の出会いを理解しようとする立場からでは、事実は見えてこない。それでは事実誤認する危険性が非常に高くなることが理解できたように思える。このことは、すべての時代、地域にも当てはまることではなからうか。私たちは、現在の自分自身の視点からのみで、過去の出来事を理解しようとしても、それでは十分な理解とはならない。これからは、これらの点を十分に考慮し、戦前の仏教を捉え直す必要があるであろう。

註

(1) 阿満利磨 『日本人はなぜ無宗教なのか』 ちくま新書

一九九六年

(2) 阿満利磨 『人はなぜ宗教を必要とするのか』 ちくま新

書 一九九七年 六八～七〇頁

(3) 『報知新聞』明治三十四年十二月七日号 『中江兆民全集』

別巻 岩波書店 一九八六年 三三二頁

(4) 河野広中(一八四九～一九二三)は、衆議院議長、農商務大臣を歴任した政治家。

(5) 草摺全宜編著 『釈雲照』上編 東洋書院 一九七八年

(初版) 徳教会 大正二(三年) 一六三～一六四頁

(キーワード) 釈雲照、中江兆民、明治仏教、宗教論